

Project Based Learning Approach in Career Education: A Case of Osaka Shoin Women's University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: TAKAMATSU, Naoki メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4041

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



PBLを活用したキャリア教育の取り組みについて —大阪樟蔭女子大学の事例から—

学芸学部 ライフプランニング学科 高松 直紀

要旨：大阪樟蔭女子大学のキャリア教育では講義・インターンシップなどさまざまな科目を展開している。昨今の大学教育においては、知識の伝達という以上に、学生の能力を高める教育が重要視されており、能動的学修としてPBL(Project Based Learning)が注目されている。本学のキャリア教育においても、インターンシップでPBLを導入している。そして、今年度はキャリア教育におけるPBLの機会を増やすために、キャリア科目の一つであるキャリア研究の授業の一環として、民間企業に協力を得、新たにPBLを実施した。今回はインターンシップ以外のPBLを活用した本学のキャリア教育の取り組みと、その取り組みから得られた学生の学びを報告する。

キーワード：PBL、プロジェクト型学習、課題解決型学習、キャリア教育、社会人基礎力

はじめに

大学・短期大学においては、社会的・職業的自立に関する指導について教育課程を通じて、それぞれの個性・特色や学問分野に応じた取り組みを行うほか、厚生補導を通じて、学生に対する各種の職業意識の形成や就職支援を行っている。これは単に卒業時点の就職を目指すものではなく、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、豊かな人間形成と人生設計に資することを目的として行われるものである。そうした中で、職業の種類や企業等の業種・規模・業務内容等の多様化を踏まえ、社会人・職業人としての基礎能力を持ち、産業構造等の変化に対応できる柔軟な専門性と創造性の高い人材を育成することが強く要請されている。また、現在の厳しい雇用情勢や、学生の多様化に伴う卒業後の移行支援の必要性等を踏まえ、学生等が、それぞれの専門分野の知識・技能とともに、職業を通じて社会とどのようにかかわっていくのか、明確な課題意識と具体的な目標を持ち、それを実現するための能力を身に付けられるようにすることが課題となっている。これらを受けて、筆者が勤務する大阪樟蔭女子大学(以下、本学とする)でも、キャリアに関する様々な科目を展開し、キャリア教育を実施している。本稿では、本学のキャリア科目の一つであるキャリア研究の授業の一環として今年度から新たに実施したPBLの取り組みと、その取り組みから得られた学生の学びをまとめたので、それを報告する。本稿の構成については次のとおりである。第1節では、本学で行われてい

るキャリア教育について、第2節では、キャリア教育にPBLを取り入れた背景について述べ、第3節では、筆者が本学のキャリア科目の一つであるキャリア研究において取り入れたPBLの授業概要について、第4節では、キャリア研究におけるPBLを通じた学生の自己評価について報告する。また、第5節では、学生の自己評価から今後の課題について述べる。

1. 本学でのキャリア教育について

本学でのキャリア教育は「自らのキャリア選択に能動的・自主的・肯定的に取組み、キャリアを選択・決定できる」ことを目標とし、キャリア設計・キャリア開発・キャリア研究の3つの科目と、就業体験型インターンシップ・学生提案型インターンシップという2つのインターンシップで構成されている。それぞれの主な内容については表1に示す。

また、本学のキャリア教育では「社会人基礎力」を養うことを目的の一つとしている。「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱しているものである。本学では学生が自己の「社会人基礎力」を評価しやすいように、社会人基礎力の全12要素を学生の行動レベルに置き換え、それぞれの要素に対して10段階で評価できる「社会で働くために必要な基礎力」という評価ツール

表1 本学キャリア科目の概要

科目名	配当学年・開期	授業内容
キャリア設計	2年生春期	「働くこと」について考え、将来について主体的に取り組む力を身につける ・自己理解を深める ・コミュニケーション能力を身につける ・キャリアインタビューから働くことについて考える
キャリア開発	2年生秋期	労働環境とキャリアデザインを理解する ・労働環境を学ぶ ・グループワークからチームで取り組む力を身につける ・キャリアプランを作成する
キャリア研究	3年生春期	就職活動に必要なスキルとPBLから社会で求められる「力」を身につける ・企業研究・業界研究の方法を学ぶ ・応募書類の作成方法を学ぶ ・PBLを通して社会人基礎力を養う
就業体験型 インターンシップ	2・3・4年生 通年	夏休み期間の約10日間を活用し、様々な業種の企業や自治体で就業体験を実施する ・事前授業として実習先の企業研究やインターンシップでの目標設定を行う ・事後授業としてインターンシップでの成果をまとめ、報告会で発表を行う
学生提案型 インターンシップ	2・3・4年生 通年	企業を実習先とし、学生が消費者としての視点・女性ならではの視点を活かしながら、企業とともに商品企画・開発を行い、マーケティングにチャレンジする ・5月～11月の約7ヶ月間のインターンシップの成果をまとめ、報告会で発表を行う

(出所) 筆者作成

表2 社会で働くために必要な基礎力

	①主体性			②働きかけ力			③実行力		
	目的意識を持って自分から進んで物事に取り組む			みんなで協力して助け合う			目標を立て、最後まで確実にやりとげる		
アクション	昇	1		1		1			
		2	わからないことも、周囲から横がく指示されれば取り組むことができる	2	他者が相談してきたときには、それに応えることができる	2	物事に取り組む際には、まず目標を明確にすることができる		
		3		3		3			
		4	わからないことは、自ら周囲に指示を仰ぎ、取り組むことができる	4	困った時には、自ら他者に相談することができる	4	苦手なことや困難なことでも、目標を定め、一歩踏み出して行動につとめることができる		
		5		5		5			
		6	周囲から求められていることや自分の役割を考え、取り組むことができる	6	普段から他者のことも気にかけるようにしており、困っている人には積極的に声をかけることができる	6	目標を達成するために、やるべきことを考え、積極的に行動することができる		
		7		7		7			
		8	周囲から求められていることを先読みし、自発的に取り組むことができる	8	みんなで協力して助け合える雰囲気づくりややる気を高めるため「やあうよ！頑張ろうよ！」など積極的に声をかけることができる	8	やると決めたことは苦手なことや困難なことでも、目標達成に向けて粘り強く取り組むことができる		
		9		9		9			
	降	10	周囲の期待以上のことを、目的意識を持って自発的に取り組むことができる	10	みんなで協力して助け合えるための具体的な仕組みや環境をつくり、目的に向かって周囲の人を動かしていくことができる	10	失敗しても自分の行動を振り返り、創意工夫しながら何度でも挑戦し目標に達するまで確実にやり遂げることができる		
シンキング	④課題発見力			⑤計画力			⑥創造力		
	現状の分析から課題を発見し、解決策を考える			課題解決に向けた効果的な行動計画を組立て、準備する			新しい発想で良い変化を与える		
	昇	1		1		1			
		2	事実を正確に把握するために、情報を集めることができる	2	課題解決に向けてやるべきことを明らかにすることができる	2	物事に取り組む際には、好奇心や問題意識を持って情報収集をおこない、問題点を明らかにすることができる		
		3		3		3			
		4	集めた情報を事実と推測に分けて整理し、客観的に課題を把握することができる	4	課題解決に向けてやるべきことの時間配分を見積もることができる	4	物事に取り組む際には、明らかにした問題を解決するための一般的な方法を考えることができる		
		5		5		5			
		6	情報を整理して、順序立てて課題を把握し、課題の背景にある原因を明らかにすることができる	6	優先順位を考えてやるべきことの順番を決め、課題解決のための行動計画を考えることができる	6	物事に取り組む際には、すでに確立された方法や考えにとらわれず、柔軟に問題解決の方法を考えることができる		
		7		7		7			
		8	情報を整理して、課題と原因の関連性を明らかにし「本当にそうなのか？」と背景を深く掘り下げ、問題の本質を見極めることができる	8	課題解決のための行動計画を複数考えることができる	8	型にはまらない目新しいアイデアを自由に複数出すことができる		
	9		9		9				
降	10	問題の本質を見極め、現実的かつ具体的な課題解決策を考案することができる	10	課題解決のために最も良い行動計画を選び、トラブルが起きた時の対処法も考えることができる	10	物事に取り組む際には、新しい発想から出たアイデアを丁寧に発展させ、目的達成に利用することができる			

	②発信力			③傾聴力			④柔軟性		
	自分の考え・意見をわかりやすく伝える			相手の話を丁寧に聴き、考え・意見を引き出す			他者を受け入れ、自分の考えや行動の幅を広げる		
チームワーク	昇	1		1		1			
	2	発表の機会が与えられれば、自分の考え・意見を伝えることができる	2	相手の発言をさえぎらずに最後まで聴くことができる	2	自分と異なる考えや意見が存在することを理解できる			
	3		3		3				
	4	自信があることについては、自ら積極的に自分の考え・意見を伝えることができる	4	適切な顔さ・相づち・表情など聴いていることを伝える姿勢を示し、相手の話しやすい環境をつくることができる	4	自分と異なる考えや意見について、受け入れられ、受け入れられないに問わず、穏やかに最後まで聴くことができる			
	5		5		5				
	6	表情・声の大きさ・話す速度などを意識し、ボディランゲージや資料などを活用し、他者にわかりやすく発信するための工夫ができる	6	話しやすい環境のもとで、相手の発言内容を丁寧に受け止め、共感しながら聴くことができる	6	自分と異なる考えや意見を受けとめ、その背景にある立場や価値観について考えながら、他者を理解しようとする可以尝试			
	7		7		7				
	8	自分の考え・意見の要点をまとめ、簡潔に伝えることができる	8	相手の話を要約し、自分の理解と相手の伝えたい内容にズレがないか確認しながら理解を深めることができる	8	自分と異なる考えや意見、その背景にある立場や価値観を理解しそれを柔軟に受け入れ、自分の考え方や行動の幅を広げることができる			
	9		9		9				
	降	10	わかりやすく伝えるために、根拠から結論まで筋道を立てた自分の考え・意見を伝えることができる	10	話の内容を理解した上で、適切な質問を投げかけ、相手の考え・意見を引き出すことができる	10	自分と異なる考えや意見、またその背景にある立場や価値観を柔軟に受け入れ、自分の考え方や行動の幅を広げながら、積極的に人のつながりを広げていく可以尝试		
チームワーク	⑤状況把握力			⑥規律性			⑦ストレスコントロール力		
	自分の役割を考えて、周囲に貢献する			社会のルールを守り、社会人としてふさわしく振る舞う			ストレスを感じることに対応する		
	昇	1		1		1			
	2	周囲に期待されている自分の役割を理解できる	2	授業で知り得た個人情報やプライバシーを漏らさない、他者に配慮した行動が実践できる	2	自分の心身の変化（不調）に早い段階で気づくことができる			
	3		3		3				
	4	周囲に期待されている自分の役割を行動にうつすことができる	4	遅刻しない・提出物の期限を守る・私語をつつしむなどの授業で必要最低限守らなければならないルールがわかり、実践できる	4	自分の心身の変化（不調）に早い段階で気づくことができ、気分転換をはかることができる			
	5		5		5				
	6	自分のことだけでなく常に周囲の状況にも気を配ることができる	6	挨拶・言葉遣い・身だしなみなどの社会人としてのマナーが理解できる	6	心身の変化（不調）の原因について、冷静に考えることができる			
	7		7		7				
	8	自分と周囲の人の状況（人間関係、忙しさなど）のなかで、自分にできること・他者にできることを考えることができる	8	挨拶・言葉遣い・身だしなみなどの社会人としてのマナーが確実に実践できる	8	心身の変化（不調）の原因を客観的に分析し、その困難に対する適切な対応を判断できる			
9		9		9					
降	10	自分と周囲の人の状況（人間関係、忙しさなど）のなかで、自分が果たすべき役割を専らで行動し、周囲に貢献することができる	10	社会人として、さまざまな場面で最低限のマナーの必要性を理解し、ルールを守り、自らの行動だけでなく、授業への参加を専らで責任ある構成員となる行動をとることができる	10	常に自分の心身の状態に気を配り、物事を最後までやり遂げるためにあらゆる困難をうまく処理していく可以尝试			

(出所) 経済産業省「社会人基礎力」をもとに筆者作成

(表2) を新たに作成し、学生はそれを用いて自己評価を行っている。学生は自己評価を通して、自己の強みを知り、伸ばしていくことができたり、自己の課題を知り、課題達成に向けての具体的な対策を考えることができたりと、自己の社会人基礎力を養うことに結びついている。

2. キャリア教育にPBLを取り入れた背景

我が国においては、急速に展開するグローバル化、少子高齢化による人口構造の変化、エネルギーや資源・食料等の供給問題、地域間の格差の広がりなどの問題が急速に浮上している中で、社会の仕組みが大きく変容し、これまでの価値観が根本的に見直されつつある。このような状況は、今後長期にわたり持続するものと考えられる。このような時代に生き、社会に貢献していくには、想定外の事態に遭遇したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決するための道筋を見定める能力が求められる。生涯にわたって学び続ける力・主体的に考える力を持った人材は、学生から見て受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必

要である。すなわち個々の学生の認知的・倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義・演習・実験・実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる²⁾。とされている。

能動的学修の中に、PBLといった学修法がある。PBLはProject Based Learningの略で、プロジェクト型学習・課題解決型学習と直訳され、学修者が主体となり、課題を解決しながら自己の学びを深めていく学修方法のことである。

本学のキャリア教育では、平成22年度より「学生提案型インターンシップ」という形でPBLを行っており、学生は企業からの課題を達成しながら、自己の社会人基礎力の向上を図っている。今年度はキャリア教育における能動的学修の機会を増やすために、キャリア科目の一つであるキャリア研究の授業の一環として新たにPBLを導入した。

3. PBLの授業概要

本稿で取り挙げるPBLは本学の3年生春期配当科目であるキャリア研究の授業の一環として実施したものである。全15回の授業のうち、第9回から第14回の6コマで実施し、100円均一商品を中心とした企画・製造・販売を行う企業に協力を得て、発売前の100円

均一商品の新たな使用用途やパッケージデザインを考案するプロセスを通して社会人基礎力の向上を図ることを目的としていた。さらに、キャリア研究の授業では第8回までに、企業研究や業界研究の方法、応募書類の書き方といった就職活動に必要なスキルを身につける授業を企画しており、PBLから就職活動の応募書類作成時に用いる自己PRのエピソードを充実させることも目的としていた。PBLの授業概要について以下の表3に示す。

表3 キャリア研究におけるPBLの授業概要

第9回 PBLグループワークⅠ
企業による講義 ・企業概要 ・PBLの課題発表 ・商品開発に必要なプロセスについての講義 グループワーク ・PBLでの目標設定 ・課題商品の使用用途を考案 ホームワーク ・100円ショップへの市場調査(個人調査)
第10回 PBLグループワークⅡ
グループワーク ・市場調査の結果を共有 ・課題商品の使用用途と市場調査の結果から商品カラー及びネーミングの考案 ホームワーク ・課題商品のパッケージデザイン案を考案
第11回 PBLグループワークⅢ
グループワーク ・パッケージデザイン案を共有 ・パッケージデザインの決定 ・パッケージの作成
第12回 PBLグループワークⅣ
グループワーク ・プレゼンテーション資料の作成
第13回 プレゼンテーションⅠ
プレゼンテーションのリハーサル ・講師、学生によるプレゼンテーションの講評 ・プレゼンテーション資料の修正
第14回 プレゼンテーションⅡ
プレゼンテーション ・企業へのプレゼンテーション ・企業によるプレゼンテーションの講評 ・優秀グループの表彰

(出所) 筆者作成

なお、企業の授業への参加は第9回と第14回のみであり、その他の授業については学生同士でグループワークを行った。

4. PBLを通じた学生の自己評価

今回のPBLでは、グループ毎に企業に向けてプレゼンテーションを行うため、「発信力」が身につくと考えた。また、商品の新たな使用用途の検討やパッケージデザインの考案など、学生がアイデアを出し合う場面が多くあるため、「創造力」が身につくと考えた。さらに、PBLを通して、グループで一つのことを最後までやり遂げることから、「実行力」が身につくと考えた。

これらの仮説を実証するために、キャリア研究を履修している学生40名にPBLの前後で「社会で働くために必要な基礎力」について自己評価をさせた。有効回答数は34であり、PBL前後の「社会で働くために必要な基礎力」の各項目の平均値と、数値の上昇の程度を表4に示す。

自己評価の結果より、「社会で働くために必要な基礎力」の全項目において、PBL前後で平均値が上昇した。平均値の上昇が高い順に「状況把握力」「実行力」「創造力」「課題発見力」「柔軟性」「発信力」「計画力」「働きかけ力」「主体性」「傾聴力」「規律性」「ストレスコントロール力」という結果となった。

「実行力」「創造力」が高まったことは仮説と一致した結果となった。「状況把握力」が高まった理由としては、今回のPBLにおけるグループ編成は3~4

表4 PBL前後の自己評価の結果

		PBL前	PBL後	前→後
アクション	主体性	4.92	5.63	+0.71
	働きかけ力	5	5.79	+0.79
	実行力	4.44	5.67	+1.23
シンキング	課題発見力	3.67	4.71	+1.04
	計画力	4.14	4.94	+0.8
	創造力	3.42	4.63	+1.21
チームワーク	発信力	3.92	4.89	+0.97
	傾聴力	5.47	5.94	+0.47
	柔軟性	5.06	6.09	+1.03
	状況把握力	4.56	5.89	+1.33
	規律性	5.39	5.63	+0.24
	ストレスコントロール力	4.47	4.69	+0.22

人を1組とした比較的少人数のグループであり、そのメンバーは普段から馴染みの深い同学科の学生同士であったため、メンバー間で課題の進捗状況を把握しやすく、協力しながらPBLを進めることができたのが影響していると考え。「発信力」の上昇が6番目となった理由としては、企業へのプレゼンテーション前に授業でリハーサルを実施し、教員と学生によるフィードバックから、資料や発表方法の修正をこと細かく行ったことが影響したのではないかと考える。また、企業には優秀グループを2組だけ選出するように依頼していたため、優秀グループに選出されなかったことを理由に、自己の発信力が不足していたからと判断したことが影響したのではないかと考える。

次に、PBL実施後、学生に自身の就職活動にPBLでの取り組みが役立つかどうかをアンケート調査した。PBLでの取り組みが就職活動に役立つと感じた学生は34名中31名で、全体の91.17%であった。主な理由としては、「社会で働くために必要な基礎力が高まったから」「自己PR作成時に具体的な活動内容が記載できるから」と、本来の目的に則したものであったが、その他には、「商品開発の流れを知ることができたから」「他のグループの発表を見て、自分に足りないものは何かを考えることができた」「インターンシップには参加できなかったが、それに近い経験ができたので、社会人基礎力を高めることができたから」などの理由も挙げられた。

5. 自己評価の結果を受けた今後の課題

平均値の上昇が上位に位置すると仮説を立てていた「発信力」に関して、企業へのプレゼンテーション前のリハーサルで教員・学生から指摘された内容の多くについてはプレゼンテーション本番では改善が認められていた。しかし、「発信力」の平均値の上昇が6番目にとどまった結果を受けて、プレゼンテーション本番で改善された内容についてフィードバックを実施していないことが原因と考える。従って、改善できていた内容についてフィードバックを行えば、学生は「発信力」について自信をもつことができたのではないかと考える。

また、今回のPBLでは協力企業にプレゼンテーションの評価を依頼したことで、評価基準が評価者の主観

に委ねられ、曖昧となったため、優秀グループに選ばれなかった理由を学生自身が正確に受け止めることができなかったことも「発信力」の平均値の上昇が伸び悩んだ原因と考える。プレゼンテーションの評価基準を整備し、具体的なフィードバックを行うことで、学生の自己評価の質を高めることができるのではないかと考える。

「社会で働くために必要な基礎力」の自己評価を通して、PBLの取り組みから、学生自身がどのような学びを得たのかを内省する仕組みは構築していたが、その評価内容が妥当であるかどうかの介入は行えていなかった。自己評価に他者評価が加わると、評価内容の妥当性が高まるため、PBL後に、自己評価を持ち寄り、学生たちが学びと能力向上の関連性を共有するような時間を設けることも改善点として考えたい。

おわりに

本稿では、PBL前後で「社会で働くために必要な基礎力」における各項目の平均値の上昇についてのみ着目し、データを分析したため、「社会で働くために必要な基礎力」の全体のバランスからわかる傾向については考慮できていない。本学におけるキャリア教育の目的の一つとして、「社会人基礎力」を養うことを挙げているため、今後は、学生の「社会で働くために必要な基礎力」の傾向を把握し、数値の低い項目を明らかにし、その項目の平均値が高められるような介入をキャリア教育として実施することが、学生の社会人基礎力の底上げに繋がると考えるため、今後の課題としたい。

引用文献

- 1 文部科学省（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm
（閲覧日 2015年8月8日）
- 2 文部科学省（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
（閲覧日 2015年8月8日）